

# 盛大に全国学会開催

松本で日本口腔外科学会

## 1500人参加 国際的な視野広げる

第四三回(旧)日本口腔外科学会総会は七、八の二日間にわたり、松本市の県松本文化会館と会館に隣接している松本市総合体育館の二会場で開かれた。総会長は千野武廣(松本歯科大学口腔外科学第一講座教授)。特別講演二

題を聴いたほか、口腔癌や顎関節、インプラントなどをテーマに、国内外から六題のワークショップと一般口演(示説発表を含む)五三〇題が行われた。歯科大学や大学歯学部、歯科口腔外科学講座所属の関係者や、病院の歯科口腔外科の医師ら約一五〇〇人が参加し活況を呈した。

千野総会長は「昨年度の総会は、京都でアジア初開催となった国際口腔顎顔面外科学会と併催された。両学会を通じて、我が国の口腔外科は国際的に高い評価を受けた。我々がアジアのリーダーとしての責任を果たしていかなければならない」とあいさつ。将来口腔外科を専攻する歯科医師が国際的な視野を持つためにも今学会が重要な意味を持つと説いた。

特別講演は初日に、国際口腔顎顔面外科学会長のDr. Peter Banksが「The Development of the Adult Client Deformity」(二日

目には作家のC・W・ニコル氏が「IN OUR NATURAL RE」を題して講演。聴衆が熱心に耳を傾けた。また示説発表は一九五題が行われた。会場となった総合

### 白熱したワークショップ

#### 海外医療援助の問題も

両日を通して六題行われたワークショップでは、演者間の討議はもちろん会場からも多くの質問が出され、予定終了時間を超えて白熱した討論を続ける姿が見られた。「特に今回は演者に第一線の若手研究者を選んだ」(千野総会長)こ



黒山の人だかりとなった示説発表

とも熱のこもった論議となつた要因のひとつだった。二日目に行われたワークショップVでは「口腔外科の海外医療援助の現状と今後の課題」をテーマに、人材派遣や人材育成、施設と器材の充実など、特にアジア地域で日本が果たすべき役割をめぐって活発な討論が行われた。三人の演者から、スリランカやベトナムなどでの医療援助活動について生の声を聞いた。指名発言では、北村

豊新生病院歯科口腔外科医長が自身の三年間にわたる青年海外協力隊の経験をもとに有効的に援助を進める上での問題点を指摘した。

ワークショップIV「発癌モデルを用いた口腔癌治療への新たな試み」では、山田哲男(松本歯科大学)が「DMBA誘発ハムスター頬嚢粘膜癌を応用したリンパ節転移モデル」と題して発表。転移モデルの特徴や転移を誘発する要因を説明するとともに、免疫抑制剤のコーチンやシクロスポリン、免疫賦活剤OK432、血管増殖阻止因子TNP470などの薬剤の及ぼす影響について報告した。

に、免疫抑制剤のコーチンやシクロスポリン、免疫賦活剤OK432、血管増殖阻止因子TNP470などの薬剤の及ぼす影響について報告した。